

# 『往生伝』と『妙好人伝』について

——新出史料『遺身往生伝』の発見を契機として——

本願寺派 菊 藤 明 道

本論文は、『往生伝』と『妙好人伝』の比較をとおして『妙好人伝』の特色をより鮮明にしようとするものである。<sup>(1)</sup>

## 1 『往生伝』の成立

『往生伝』とは、諸行や念仏行を修して瑞相を示し、浄土に往生を遂げた人びとの伝記を集めた書物である。<sup>(2)</sup>

『往生伝』の成立はすでにインドで見られ、伝世親記・羅什訳とされる『天竺往生験記』がある。中国でも戒珠の『浄土往生伝』、王古の『新修浄土往生伝』、『新編古今往生浄土宝珠集』、文諒・少康の『往生西方浄土瑞応刪伝』(『瑞応伝』)、株宏の『往生集』などが作られている(『続浄土宗全書』第一六卷、収録)。

わが国最初の『往生伝』は、薬師寺の僧景戒が仏教説話集『日本靈異記』を著してから約百五十年後に書かれた『日本往生極楽記』である。平安中期の永観二年(九八四)から寛和元年(九八五)ごろに、慶滋保胤が出家や在

俗の男女四十五人の往生の話を四十二話に収めた書物である。その後、院政期を中心に多くの『往生伝』が編集された。鎮源『大日本国法華経験記』（別名『本朝法華験記』、長久年間、一〇四〇—一〇四四）、大江匡房『続本朝往生伝』（康和三年、一一〇一—天永二年、一一一一）、三善為康『拾遺往生伝』（天永二年、一一一一—保延五年、一一三九）、三善為康『後拾遺往生伝』（保延三年、一一三七—保延五年、一一三九頃）、蓮禪『三外往生記』（保延五年、一一三九以後）、藤原宗友『本朝新修往生伝』（仁平元年、一一五一）、如寂『高野山往生伝』（文治三年、一一八七以後）などである（『続浄土宗全書』第六卷。『往生伝・法華験記』日本思想大系、岩波書店刊、収録）。それが鎌倉時代に入ると、昇蓮の『三井往生伝』と行仙の『念仏往生伝』など数点が見える程度で『往生伝』が作られることは殆どなかった。その理由について笠原一男氏は『近世往生伝の世界』（教育社、一九七八年）で、「平安時代の「伝」による布教から、鎌倉期にはすぐれた祖師たちが輩出したため「論」による布教へと変化した」といわれている。

## 2 近世の『往生伝』について

江戸時代に入ると多くの『往生伝』が編集版行された。『妙好人伝』を含めて列記すると次のとおりである。

(浄) 浄土宗 (真) 真宗 太字 妙好人伝

1 (浄) 独湛性登『扶桑寄帰往生伝』（延宝元年、一六七三）

2 (浄) 勇大『扶桑往生伝』（天和三年、一六八三）

3 (浄) 山本治齋『日本古今往生略伝』（天和三年、一六八三）

4 (浄) 向西湛澄『女人往生伝』（貞享二年、一六八五）

『往生伝』と『妙好人伝』について

- 5 (浄) 了智『緇白往生伝』(元禄元年、一六八八)
- 6 未詳『浄土勸化三國往生伝』(元禄二年、一六八九)
- 7 (真) 如幻『近世往生伝』(元禄八年、一六九五)
- 8 (浄) 珂然『新聞顕驗往生伝』(正徳元年、一七一)
- 9 (浄) 龍淵殊意『遂懷往生伝』(享保十七年、一七三二)
- 10 (浄) 宝州『東域念仏利益伝』(元文二年、一七三七)
- 11 (浄) 桂鳳『現証往生伝』(元文四年、一七三九)
- 12 (真) 諦聰『遺身往生伝』(元文五年、一七四〇)
- 13 (真) 仰誓『親聞妙好人伝』(宝暦三年、一七五三)(写本)
- 14 (真) 月筌『親聞往生験記』(宝暦五年、一七五五。奥書、享保四年、一七一九)
- 15 (浄) 大順『勢州緇素往生験記』(明和六年、一七六九)
- 16 (真) 仰誓『妙好人伝』(天明四年、一七八四)(写本)
- 17 (浄) 関通『随聞往生記』(天明五年、一七八五)
- 18 (浄) 了吟『新撰往生伝』(寛政元年、一七八九)
- 19 (浄) 隆円『近世南紀念仏往生伝』(享和二年、一八〇二)
- 20 (浄) 隆円『近世念仏往生伝』(文化三年、一八〇六—文政十三年、一八三〇)
- 21 (浄) 隆円『近世淡海念仏往生伝』(文政八年、一八二五)
- 22 (真) 克讓『新続妙好人伝』(文政十一年、一八二八)(自筆本)
- 23 (真) 真鏡『新選念仏往生験記』(天保八年、一八三七)

- 24 (真) 僧純『妙好人伝』初篇(天保十三年、一八四二)
- 25 (真) 僧純『妙好人伝』二篇(天保十四年、一八四三)
- 26 (真) 僧純『妙好人伝』三篇(弘化四年、一八四七)
- 27 (真) 僧純『日本往生伝和解』(嘉永四年、一八五二)
- 28 (真) 象王『続妙好人伝』初版(嘉永四年、一八五二)
- 29 (真) 僧純『妙好人伝』四篇(安政三年、一八五六)
- 30 (真) 僧純『妙好人伝』五篇(安政五年、一八五八)
- 31 (真) 象王『続妙好人伝』改訂補刻版(安政六年、一八五九)
- 32 (浄) 音空『専念往生伝』(文久三年、一八六三序)
- 33 (浄) 音空『入水往生伝』(慶応元年、一八六五序)
- 34 (浄) 行阿『尾陽往生伝』(慶応四年、一八六八)
- 浄土宗の『往生伝』が圧倒的に多く(9龍淵殊意と32・33音空は西山浄土宗)、真宗の『往生伝』は7・12・14・23・27の五点にすぎない。

### 3 真宗の『往生伝』について

近世の『往生伝』の多くは浄土宗の僧によって編集されたが、少数ながら真宗の僧が編集した『往生伝』が存在する。

## ①如幻撰『近世往生伝』（全一卷）

本書は、真宗の僧・如幻明春（寛永十一年、一六三四—元禄七年、一六九四）が元禄七年（一六九四）正月に漢文で記したものである。如幻は本書を撰述した後、同年十一月二十六日に六十一歳で没したので、版行は如幻と親交のあった「近州妙蘭若真宗後学好堅」（未詳）が元禄八年（一六九五）に行っている。如幻については、本書

「付録」の好堅が書いた「長泉寺明春法師行業記」に記され、「追加」には「長泉寺明春法師妻」が記されている。

如幻は、字を明春と言い、摂州茨木の出身で宇都宮頼綱の後裔であった。津陽天満本泉寺で「浄土専念之宗」を受け、万治三年（一六六〇）に真宗高田派本山専修寺第十四代門跡堯秀（天正十年、一五八二—寛文六年、一六六六）の好意で専修寺に入り、宝蔵に収蔵されている親鸞の真蹟を数多く書写した。一身田に二十六年間留まったが、貞享二年（一六八五）五十二歳で京都の真宗仏光寺派本山仏光寺に移り、以後亡くなるまでの約九年間、内典外典を講じた。讃州・泉州・和州・摂州・江州・越州に赴いて真宗の教えを説いた。かつて、「我願くは安養界に往生せば証妙覺に登らず。位無生忍に居して穢国に還来し、一切衆生を利益すること地藏観音の如くならん」と語ったことが記されている。好堅は末尾に如幻を讃えて「所謂如来の使いにして世間に和光する者なり」と記している。なお『真宗人名辞典』（法蔵館刊）の「如幻」の項には「真宗高田派の僧」と記されているが、如幻の名は高田派の史料に見えない。また、如幻が住した長泉寺（京都市右京区御室岡ノ裾町）は現在浄土宗鎮西派の寺である。

本書冒頭に載る版行者好堅の「近世往生伝題辭」には、「西方有仏、号無量寿、本誓力強、善惡齊摂、於戲勝緣所牽、宿福所熟、無量劫中而一遇也、非憑於斯門出離依何教」と記されている。西方極楽浄土の無量寿仏の本誓力は強く、善人・悪人を齊しく救うことを説いて、浄土の教えに帰依するよう勧めている。さらに、如幻と好堅の親交の様子、本書の概要が記され、また、「与公並成報仏恩」の文が見える。好堅は本書が「公」と「仏恩」を報ず

るものである、と記しているのである。

本書に収められている往生人の数は、「沙門往生篇」十二人、「尼僧往生篇」三人、「士夫往生篇」十二人、「婦女往生篇」十八人、計四十四人であるが、好堅による「追加」二人と「付録」二人を加えると総計四十八人となる。二十二人は伊勢の人である。如幻が高田専修寺にいた頃に見聞した人たちであろう。京都の人は九人であり、仏光寺に移ってから見聞した人たちと思われる。往生人の性状として正直・柔和・慈悲・孝行が記されている。高声念仏・六時礼讃・臨終正念や紫雲・天華・光明・異香・舍利などの靈瑞、少数ではあるが仏・菩薩の来迎も記されている。なお、本書の元禄八年（二六九五）の初版本が筑波大学図書館に、寛延四年（二七五一）の版本が龍谷大学図書館に収蔵され、笠原一男編『近世往生伝集成』二（山川出版社、昭和五十四年刊）に収録されている。

## ②真鏡撰『新選念仏往生験記』（全三巻）

本書は、真宗高田派専修寺教団の学僧・真鏡（寛政三年、一七九一—慶応三年、一八六七）が天保八年（一八三七）父鳳林の十三回忌に版行したものである。僧や俗人の往生の話が収められ、奇瑞・靈験がかなり記されている（笠原一男編『近世往生伝集成』二に収録）。

真鏡は、伊勢光福寺の鳳林の三男として生まれ、高田派の学僧法霖（安永元年、一七七二—文政十二年、一八二九）に学び、戸木西向寺や伊勢飯南郡花園（三重県松坂市駅部田町）の光明寺の住職を務めた。僧伝の研究で知られる（『高田の古徳』高田本山専修寺刊。『真宗人名辞典』法藏館刊、参照）。

「巻之一」には、「候家御往生之部」三人、付録の「僧衆往生之部」二人、計五人が記されている。「巻之二」には「僧衆往生之部」十二人、「信士往生之部」九人の計二十一人、それに「付伝」七人を加え計二十八人の話が記されている。「巻之三」には三人の在俗の男性（信士・居士）の話の後に、「女人往生之部」八人（信女・童女・法尼）、「発

心往生之部」五人、「付伝」に三人の計十九人が記されている。三巻の総計は五十二人である。伊勢の人が多い。

往生人は、本願を信じて念仏することのほか、正直・慈悲・孝行・忠義・柔和・従順・精勤などの倫理も記されている。また、奇瑞・靈瑞・聖衆来迎が記されているが浄土宗系の『往生伝』に比べると少ない。真鏡は冒頭の「新選往生験記述意」で「ひたすら臨終の善悪のみを論じて、往生の得否を定むべからず。異香よりも紫雲よりも但信称名の声をもて、往生極楽のしるしまつべきなり」と記している。「但信称名」こそ「極楽往生のしるし」であると説いて真宗の立場を明示している。真鏡の本書作成の意図については、「人々の疑心を晴らし、大信開悟して如来の本願に帰入させる」ため、と記している。真鏡は別に『新選往生験記追加別伝』（一卷）を著しているが、本書は寛政六年（一七九四）に往生を遂げた「閑院一品宮典仁」の往生の話であり、彼の念仏生活と往生時の奇瑞や聖衆来迎が記されている。末尾の記述から、真鏡が国学者や儒者たちの廃仏論を意識して往生人の伝記を集め、人びとを浄土の教えに導こうとしたことが知られる。

### ③月筈撰『親聞往生験記』（全一卷）

本書は、江戸中期の西本願寺派（浄土真宗本願寺派）の学僧・月筈（寛文十一年、一六七一一—享保十四年、一七二九）が書いた『真宗関節』（全五巻）巻五「不来迎問答」の後に付されている。『真宗全書』第五十三巻に収録されている。『不来迎問答』全四巻（二冊）が龍谷大学図書館に収蔵されており、付録に「親聞往生験記」が載せられている。享保四年（一七一九）の奥書がみえる。次の四話が記されている。「妙涼尼往生ノ瑞夢ヲ感スル事」「妙了尼臨終ニ見佛ノ祥瑞アル事」「妙智童女ノ現瑞アル事」「宗信禪門遺言ノ事」。

堅固の信心と仏恩報謝の念仏、さらに往生の祥瑞が記されている。平生における獲信を強調し祥瑞や臨終来迎を期待しない真宗において、往生の奇瑞や来迎が記されているのである。月筈の来迎思想は「不来迎問答」に詳述さ

れており、祥瑞や臨終来迎を肯定的にとらえている。信心堅固の話が多く、世俗倫理は記されていない。なお、僧純編『妙好人伝』第三篇・巻上に収められている四話「播州妙涼」「撰州妙了」「京都又兵衛女」「泉州宗信」は、本書の右の四話を採っている。

#### ④諦聴撰『遺身往生伝』(全一卷)

本書は、信州水内郡神代(現、長野市豊野町豊野)の東本願寺派(現、独立寺院)円徳寺の諦聴が元文四年(一七三九)十月に撰述し、元文五年(一七四〇)四月に京都堀川錦上ル町、京都載文堂・西村市郎右衛門と東都本町三丁目、東都文刻堂・西村源六が版行したものである。『仏書解説大辞典』第一卷(大東出版社刊)、『国書総目録』第一卷(岩波書店刊)、禿氏祐祥編『書目集覧』(宝曆書籍目録)(東林書房刊)に書名が見えるが、何れも撰者が「性均」「大法」と誤記されている。

本書はこれまで所在が不明であったが、調査の結果、平成十八年(二〇〇六)十一月二日、元文五年(一七四〇)の版本が長野県上水内郡飯綱町古町の真宗大谷派願法寺に収蔵されていることが判明した。内題には「大法沙弥遺身往生伝」と記されている。「遺身往生伝叙」は諦聴が記し、「遺身往生伝跋」は西本願寺派の学僧であった江戸築地(現在、東京都調布市若葉町)安養寺の性均(延宝七年、一六七九—宝曆七年、一七五七。知空門下。『真宗新辞典』法蔵館刊、参照)が記している。龍谷大学編纂『仏教大辞彙』第四卷の「性均」の項には、著作の中に『遺身往生伝』(二卷)と記されているが誤記であり、正しくは「遺身往生伝跋」である。

本書は「大法沙弥」一人の往生伝である。大法は、信州水内郡荒井村(現、長野県上水内郡飯綱町古町)、東本願寺派(現、真宗大谷派)願法寺の住職の弟で、諦聴に師事し宗義を学んでいたが、すみやかな還相の利他の活動を願って元文二年(一七三七)霜月十七日に十八歳で入水往生を遂げている。師の諦聴が大法の捨身往生に悲愁感



動し、大法の四通の遺書を載せ、『発心集』や『本朝僧伝』の往生人の話、『瑞応伝』に載る善導大師の捨身往生の話などを引きながら、大法の捨身往生を非難することなく生死無常の理にめぐめて真摯に仏道を歩むよう記している。象王編『統妙好人伝』巻下の「信濃国僧大法」の話の末尾に「この事遺身往生伝に委し」と記されている。

⑤ 僧純撰『日本往生伝和解』（全二巻）

本書は、幕末期に『妙好人伝』（全五篇）を編集版行した西本願寺派の僧純（寛政三年、一七九一—明治五年、一八七二）が、嘉永四年（一八五二）十一月に編集版行したものである。上下二冊に四十一人の往生人の話が収録されている（普門山専精寺藏板、京都、永田調兵衛・丁字屋庄兵衛・丁字屋定七刊。龍谷大学図書館蔵）。

僧純は、天保十三年（一八四二）に『妙好人伝』「初篇」を、天保十四年（一八四三）に「第二篇」を、弘化四年（一八四七）に「第三篇」を版行しており、四年後の嘉永四年（一八五二）に『日本往生伝和解』を版行したのである。それから五年後の安政三年（一八五六）に『妙好人伝』「第四篇」を、安政五年（一八五八）に「第五篇」を刊行している。『妙好人伝』の版行中に『日本往生伝和解』を版行したことになる。

「上巻」の聖徳太子・行基菩薩・慈覚大師・勝如比丘・空也上人・千観律師・薬蓮沙門・藤原氏女・勢州老女は『日本往生極楽記』に収められている人たちであり、編者慶滋保胤の名も見える。「下巻」には貴族や文人、また、『往生拾因』の著者・永観律師、『唯信鈔』の著者・聖覚法印、『一念多念分別事』の著者・隆寛律師、さらに、蓮生房・住蓮房・安楽房などの法然門下の僧の話も収められている。また、源太夫・甘糠太郎・津戸三郎・相模四郎・耳四郎など俗人・悪人の念仏往生の話も載せられている。近世の『往生伝』や『妙好人伝』に見られる孝行・正直・従順・精勵・質素・儉約などの世俗倫理は見られない。本書は浄土宗の『往生伝』に見られるような自己策勵的な専修念仏行を勧めるものではなく、『妙好人伝』のように真宗の篤信者の言行を伝えることで世の人びとを

直接真宗の教えに導くものでもない。序に「宿縁あらんひとびとを仏道に誘引せしむるのたよりともなりなん」と記しているように、僧純は人びとを仏道に誘うために本書を編集版行したのである。

なお、明治に入って版行された真宗の学僧による『往生伝』としては、本願寺派の赤松皆恩訂正『日本往生全伝』五卷（永田文昌堂刊、明治十四年、一八八一—一八八五年、一八八二。龍谷大学図書館蔵）がある。平安の『往生伝』の覆刻である。それ以後に真宗の僧によって編集版行された『往生伝』は現在のところ見当らない。

浄土宗系の『往生伝』には、念仏行を励んで瑞相を得、弥陀・聖衆の来迎を受けて往生を遂げた人たちの伝記が多く収められている。日課念仏一万遍・三万遍・六万遍など数多くの念仏行の他に、經典読誦、持戒、臨終正念、見仏、五重相伝など、浄土宗の教えが色濃く見える。収録されている往生人は僧尼が多く、俗人としては武士・商人・農民などが見える。

真宗系の『往生伝』には、自力的な諸行や数量的念仏行の話は少ない。他力の信心の獲得と仏恩報謝の生活の話が多い。中には、高声念仏や臨終来迎の話も見えるが浄土宗系の『往生伝』に比べると少ない。奇瑞・瑞相の話がしばしば見られるが、それは浄土宗系の『往生伝』の影響というよりも、真宗の学僧・月筈の思想によるものではないか。真宗の『往生伝』の奇瑞や来迎は、それ自体が目的とされるものではない。

#### 4 近世の『妙好人伝』について

江戸時代に編集された最初の『妙好人伝』は、西本願寺派（浄土真宗本願寺派）の学僧・仰誓（享保六年、一七二一—寛政六年、一七九四）が編集した『親聞妙好人伝』（二巻）である。

仰誓は、享保六年（一七二一）に京都西六条の明覚寺に生まれ、寛保三年（一七四三）二十二歳の時、伊賀上野

の明覚寺に入寺し、寛延二年（一七四九）二十八歳の時に大和の清九郎と出会って感動し、清九郎の言行を記録し、宝暦三年（一七五三）頃に篤信者十人の話を集めて『親聞妙好人伝』を編集したといわれる。その後、明和元年（一七六四）四十三歳の時に、西本願寺第十七代門主・法如の命で石見の市木（現、島根県邑智郡邑南町市木）の浄泉寺に移住した後、さらに篤信者の話を集め、天明四年（一七八四）頃に三十六話（第十六話は本文欠）を収めた『妙好人伝』（二巻）（第一は『親聞妙好人伝』と同じ十話）を編集したのである。

また、浄泉寺の学寮で仰誓の子・履善に学んだ伊予の克讓（天明七年、一七八七—元治二年、一八六五）が、文政十一年（一八二八）に二十四人の話を収めた『新続妙好人伝』（二巻）を編集している。しかし、これらの『妙好人伝』は版行されることはなかった。現在、『親聞妙好人伝』の写本が五本存在することが朝枝善照著『続妙好人伝基礎研究』（永田文昌堂、平成十年刊）に記されているが、そのうち二本が龍谷大学図書館と京都大学付属図書館に収蔵されている。また、仰誓編『妙好人伝』の克讓書写本と克讓編『新続妙好人伝』の克讓自筆本は愛媛県立図書館伊予史談会文庫に収蔵されている。土井順一氏によって発見され、土井順一著『妙好人伝の研究——新資料を中心として——』（百華苑、昭和五十六年刊）に収録されている。

『妙好人伝』が最初に版行されたのは、幕末の天保十三年（一八四二）であった。美濃垂井（岐阜県不破郡垂井町）の本願寺派専精寺の僧純（寛政三年、一七九一—明治五年、一八七二）が、仰誓の『妙好人伝』を再編して同年「初篇」を版行し、翌天保十四年（一八四三）に「第二篇」を、弘化四年（一八四七）に「第三篇」を、安政三年（一八五六）に「第四篇」を、安政五年（一八五八）に「第五篇」を版行している（専精寺藏版本）。

さらに、東本願寺派の象王は、仰誓の志を継ぐと嘉永四年（一八五二）に『続妙好人伝』（一卷）を編集版行（五梅園藏版本）したが、八年後の安政六年（一八五九）に数話を入れ替え、また文章の改変を行った改訂補刻本（文醒堂藏版本）を版行している（拙著『妙好人伝の研究』法藏館、平成十五年刊、参照）。

仰誓・僧純・象王の『妙好人伝』にはそれぞれ特色が見られる。

①仰誓編『妙好人伝』・克讓編『新統妙好人伝』の特色

仰誓編『妙好人伝』（全二巻）には、浄土宗の『往生伝』に見られるような自己策励的な念仏修行によって臨終来迎往生を遂げた話はなく、神秘的な奇瑞・靈驗譚も少ない（奇夢、五色舍利の話が見える程度）。「大和の清九郎」の話に代表されるような、篤信者の厚信と孝行・勤儉・慈愛などの倫理的言行、さらに仏恩報謝の生活の話が多い。他力の信心をいただいて、「現生十種の益」をめぐまれた「信心の行者」「金剛心の行人」の伝記である。また、現世祈祷否定・神祇不拜などの真宗の教えや宗風が随所に記されている。他宗（日蓮宗・浄土宗・禅宗など）から真宗に転向した人の話もいくつか見える。また、悪行を行っていた人が真宗の教えに帰して悪を改めた話も見える。幕府を意識した記述は殆ど見られない。仰誓は本書によって、親鸞・蓮如が説いた如来回向の真実信心と真宗の宗風を人びとに伝えようとしたことが窺える。仰誓は、後半生を石見の浄泉寺の住職として学寮を造り、多くの僧侶を教導した真摯な学僧であった。「石州学派の祖」といわれ、きびしく門弟たちの生活態度を律したので「真宗律」ともいわれる。

本書に収録されている人は「第一巻」に十人、「第二巻」に二十六人の計三十六人であるが、西本願寺の門徒だけでなく、東本願寺派や高田派の門徒も教話収められている。『教行信証』から一文引かれているが、多くは『御文章』から引かれている。他の書物からの引用は見られない。

克讓が履善の依頼をうけて撰述した『統妙好人伝』（上下二巻）には、上巻に十二人、下巻に十二人、計二十四人の話が収められている。浄泉寺にかかわった人たちや石見の人の話（十一人）が多く収められている。聞法をとおして他力の信心を獲得し、仏恩報謝の生活を送り、人びとに信心獲得を勧め、浄土往生を遂げた人たちの話が多い。悪行を改

めた人の話や、他宗から真宗に転じた人の話もいくつか収められている。奇瑞・靈瑞・臨終来迎などは殆ど記されていない。世俗倫理の教示もない。本書に見える書物は、『正信偈』『和讃』『御文章』のほか、浄泉寺第五代知覚著『相岡物語』、第十一代仰誓著『唱導蒙求』、第十二代履善著『教導議』など、浄泉寺の住職が著した書物である。

## ②僧純編『妙好人伝』の特色

僧純編『妙好人伝』全五篇・各上下二卷（專精寺蔵版本）に収められている妙好人は、西本願寺派の門徒が多いが、東本願寺派の門徒も数名収められている。目録に記されている話の数は、「初篇」二十二話、「二篇」三十七話、「三篇」十九話、「四篇」二十七話、「五篇」二十一話、計百二十六話である。そのうち女性の話は三十五話である。収録されている人の職業は農民がもっとも多く、次に商人が多い。そのほか武士、医者、坊守などが数名見える。僧（住職）は一名（四篇巻上、豊後西旋）のみである。

僧純は『妙好人伝』の中で真宗の教えや宗風を教示している。とくに蓮如の「信心為本・王法為本」の教説と、本山崇敬・門主崇拜・王法世法遵守・神祇不拜不軽のほか、孝行・忠義・正直・儉約・勤勉・年貢完納などの世俗倫理も記されている。第三篇・巻下には妙好人の話は載せられておらず、すべて僧純の教説が記されている。一「神明帰仏」、二「帝王帰仏」、三「公武帰仏」、四「神職帰仏」、五「神棚之事」、六「鬼門」、七「金神」、八「物忌之事」、九「掟ごころえ歌」の項目で真宗の教えや宗風・掟を教示しているのである。

また、第四篇・巻上の「濃州樹誓（千代）」の話には、美濃縁覚寺の坊守千代に宛てた僧樸の手紙を、同篇・巻下の「摂州さよ女」の話の末尾には摂州光専寺の坊守さよ宛ての仰誓の手紙を載せて信心獲得の大切さを示している。同「越中のよ女」や「奥州とく女」の話では、西本願寺教団の異義「三業帰命」への批判を記している。文化元年（一八〇四）から文化三年（一八〇六）を頂点とする前後十年に及んだ三業惑乱事件が僧純の『妙好人伝』に

も影を落しているのである。第五篇の末尾には「仏恩」「師恩」「国恩」「親恩」「孝行粉引歌」を記している。

本書に記されている書物は左記のとおりである。

『正信偈』『御和讃』『御文章』『改悔文』『御一代聞書』『御伝鈔』『元亨釈書』『本朝通記』『沙石集』『袋草紙』『空也伝』『撰集鈔』『日本書紀』『続日本紀』『日本後記』『神国決疑編』『天下太平国土安穩記』『三代実録』『日本往生極楽記』『日本往生伝』『天竺往生伝』『勸化往生伝』『念仏往生伝』『続念仏往生伝』『親聞往生験記』『和語灯録』『古徳伝』『照蒙記』『論語』『鳩翁道話』『統鳩翁道話』『近世叢語』『良民伝』『聖学問答』『谷響集』『国史略』『説苑』『正明伝』『春日記』『諸神本懐集』『清九郎伝』『孝信庄之助伝』『七三郎生涯記』『百条法話』『博多記』『石城記』『西光寺讓状』『西応寺了幻記録』『僧分教誡』『坊守教誡』『高城家儀』『真行寺隆性記録』『僧様書簡』『仰誓筆録』『仰誓書簡』『誓鑑記録』『本迹一致問答』『論客護法篇』『僻難对弁』『南嶺子孝信録』『神道俗談弁』『雪窓夜話』『三ヶ条筆録』『神棚訣』『神仏水波弁』『随聞試答篇』『本懐集』『来意鈔』『顕正鈔』『心地観経』。

僧純はこうした多くの書物を用いて真宗の信心や宗風を示したが、『往生伝』類からの引用も七点と多い。

僧純の『妙好人伝』撰述の背景には、西本願寺の広如門主の命を受け、本願寺の財政再建や大谷本廟の石橋の架設、角坊別院の再建、『法要典拠』出版の募財などの諸事業を行った行政僧としての僧純の立場や、教団内の異義・異安心、幕府の寺院統制の強化、儒学者・国学者・経世論者たちの廃仏論、新宗教の勃興などさまざまなものがあったのである。また、仰誓や克讓の『妙好人伝』と違って往生の奇瑞・祥瑞の話を多く載せている。往生の奇瑞について僧純は次のように記している。

此等の奇瑞（往生人の死骸の口から蓮華が生じた話）は疑ひ深き我等をして信を得せしめんための善巧なるのみ（『妙好人伝』二編・卷上、「筑前明月女」）。

僧純は、往生の奇瑞が真宗の教説でないことを熟知しながらも、民衆の感情や願望など、凡情に訴えることで人

びとを真宗の教えに導こうとしたのではないか。

また、第四篇・巻上「豊後西旋」の話の末尾に、元禄二年（一六八九）に版行された『勸化往生伝』巻六（編者不詳、龍谷大学図書館蔵）の「悪人之部」に載る唐の悪人「雄俊」の往生の話を記し、次の「伯州九右衛門」の話の末尾には『勸化往生伝』巻三の「畜類鳥之部」に載る「猿」と「鶯」の往生の話を引いている。悪人往生とともに、鳥獣も勸化を受けて往生を遂げた話を引いて「万物の長たる人間と生まれて仏法を信ぜざるは実に恥入るべき事の限りならんかし」と記している。

さらに、僧純は、第三篇・巻上に西本願寺派の学僧・月峯撰『親聞往生験記』（宝暦五年、一七五五）から四話を引いている。「播州妙涼」「撰州妙了」「京都又兵衛女」「泉州宗信」の話である。往生の奇瑞・浄土の夢・臨終見仏・来迎など、奇瑞・祥瑞の話が載せられているが、臨終の祥瑞について「泉州宗信」の話の末尾に次のように記している。

然るに今家の門人の中に不來迎の言を執じて臨終の祥瑞等ありと云う事を忌嫌いて、反て謗難毀罵して邪見に墮するものあるを歎くが故なり。往生は何事も凡夫の量に非ず、信せば冥顕の機感何輒くその是非を測り定むべきことならんや。総て今家に談ぜらるる不向不來迎の名目を心得誤りて、仏祖の正意を壅塞するやうに沙汰する者もあるは返々々も浅間布悲しきことなり。宗脈を継んと欲する者はよくよく此事理を弁うべき事になん。此事月峯師の親聞往生験記に出たり。

真宗信徒の中に不來迎の教えに固執して臨終の祥瑞を否定する者がいるがそれは大きな誤りである、と記しているのである。

なお、『親聞往生験記』は、月峯（寛文十一年、一六七一一享保十四年、一七二九）が宝暦四年（一七五四）に著し、宝暦五年（一七五五）五月に版行された『真宗関節』全五卷（『真宗全書』第五十三卷、所収）巻五「不來

迎問答」の「付録」に見え、次の四話が収録されている。「妙涼尼往生ノ瑞夢ヲ感スル事」「妙了尼臨終に見佛ノ祥瑞アル事」「妙智童女往生ノ現瑞アル事」「宗信禪門遺言ノ事」。この四話には臨終における祥瑞が記されている。僧純が右の四話を『妙好人伝』三篇・巻上に引いているところから、僧純が『真宗関節』を読んで月筈の思想の影響を受けていたことが知られるのである。

月筈は右の四話の末尾に臨終来迎や祥瑞について、ここに記した験記は自分が直接見聞したものであること、真宗では不回向・不來迎を説くが、その言葉に執して臨終の祥瑞を忌み嫌って非難するのは凡夫のはからいであり邪見であると批判している。さらに、『真宗関節』巻五の「不來迎問答」巻之四で、臨終来迎について、「元祖ノ本意モ平生ニ信心堅固ナル者ノ前ニハ、臨終ヲ期シ來迎ヲ待ヘシトハ勸メ玉ハス。來迎ヲ期スルマテモナシトアルハ、ヒトヘニ平生ノ深信ヲ退転ナキヤウニ守護シ玉ハン為ナリト思フヘキ也」「今家ノ門人ノ中ニモ、一偏ニ臨終ノ祥瑞ヲ撥無スルヤウニコ、ロウル者アリ。コレハマタ吾祖ノ骨髓ヲ知ラヌト云モノ也」と述べている。僧純の『妙好人伝』に奇瑞・靈瑞が多く見られるのは、『真宗関節』に見られる月筈の思想の影響によるものであろう。なお、僧純は、『妙好人伝』第五篇版行（安政五年、一八五八）から三年後の文久元年（一八六一）に『親鸞聖人靈瑞編』一冊（正聚房藏版、龍谷大学図書館蔵）を版行している。「川越之名号」「焼残名号」「倒竹之奇瑞」「二度掛名号」「身代之本尊」など二十九の靈瑞譚が集録されている。末尾（三〇）の「臨終奇瑞論」では、平生の獲信による不來迎・平生業成の義を強調しつつ、臨終の奇瑞・靈瑞を肯定しているのである。

### ③ 象王編『続妙好人伝』の特色

象王編『続妙好人伝』（全一篇・上下二巻）に収録されている妙好人は、本書に出てくる寺院の調査の結果、その殆どが東本願寺派の寺であることが判明した。収録されている人も東本願寺派の門徒が殆どである。



象王については、これまで佐々木倫生氏や柏原祐泉氏によつて「西本願寺派の僧であろう」といわれてきたが、本書巻上の「山田文右衛門」の話の分析から北海道松前郡松前町唐津真宗大谷派専念寺に関わる僧であることが判明した。また、序を真宗仏光寺派学頭の花暁が書いていることから花暁とも親交があったことが窺える。しかし、象王についてはこれ以外に史料が無く、行跡は現在のところ不明である。

『続妙好人伝』が版行されたのは、僧純の『妙好人伝』第三篇が版行された弘化四年（一八四七）から四年後の嘉永四年（一八五一）（五梅園蔵版本）であるが、それから八年後の安政六年（一八五九）には改訂補刻版（文醒堂蔵版本）が版行されている。改訂版ではいくつかの話が差し替えられ、記述が真宗的に改められ、幕府への恭順の記述が挿入されるなどの変更が見られる。その間の象王の宗学の進展と、幕府の宗教統制の強化や、国学者・儒学者たちの廃仏論の影響が考えられよう。

本書には次の書物の名が見える。

『海岸語類』『遺身往生伝』『新選発心伝』『勸化』本朝新因縁集』。

『海岸語類』は義導の撰であり、『遺身往生伝』は東本願寺派の僧・諦聴の撰であり、『新選発心伝』は西本願寺派の学僧・性均の撰である。『勸化本朝新因縁集』は蓮盛が安永六年（一七七七）に撰述したものである。『新選発心伝』と『勸化本朝新因縁集』は龍谷大学図書館に収蔵されている。『往生伝』は『遺身往生伝』のみであり、他の『往生伝』の名は見えない。儒学者や国学者の著書の名も見えない。

本書に記されている話の数は二十四話（付録の一話を含む）であるが、そのうち女性の話は七話である。農民、商人、武士などのほか、僧の話が三話収められているのも特色の一つであろう。僧純の『妙好人伝』（全五篇）では、総計一二六話中、僧（住職）の話は一話（四篇・巻上、「豊後西旋」）であるのに比べ、さわめて多いのである。僧の話は次の三話である。

一、卷上「越後僧智現」二、卷下「信濃国僧大法」三、卷下「参河国僧廓三」

一、「越後僧智現」は、越後（新潟県三島郡出雲崎町羽黒町）の真宗大谷派・浄玄寺の住職であつた。東本願寺の高倉学寮で深励に学び、文政二年（一八一九）に擬講、天保二年（一八三一）に嗣講（明治二十七年、一八九四、贈講師）に任ぜられた学徳ともにごくれた人であつた。象王は東本願寺派の学僧を「妙好人」として本伝冒頭に収めたのである。このような例は仰誓や僧純の『妙好人伝』には見られない。

二、「信濃国僧大法」の話は、諦聴撰『遺身往生伝』（全一卷）から採つたものである。話の末尾には、大法を「末世に有難き往生人なり」と記している。「妙好人」と「往生人」を同一視しているのである。

三、「参河国僧廓三」の話は、諦聴撰『遺身往生伝』の跋文を書いた西本願寺派の学僧・性均（宝延七年、一六七九—宝暦七年、一七五七）が編集した『新選発心伝』一冊上下（元文二年、一七三七、龍谷大学図書館蔵。西田耕三校訂『仏教説話集』二、国書刊行会、一九九八、収録）から採つたものである。

『新選発心伝』によると、僧廓三は愛知県刈谷市元町の東本願寺派（現、真宗大谷派）専光寺の生れで道心堅固な僧であつた。鳳来寺の薬師仏の前で一七日道心堅固を祈つて称号断食し、また、自分の血で浄土三部経を書写するなど苦行的な仏恩報謝行を行い、宝永三年（一七〇六）六月五日に坐亡往生を遂げている。性均は、廓三の話の末尾に、「坐亡の相貌は予が檀越権兵衛といへる者、其時所以ありて三州刈屋の専光寺にありて、親まのあたりにこれを見て語れり。親見真事なり。予法師と旧友にして断金の交をなせり。故に先年其行状を記録して、摂州坂陽の宝泉珂然師へ送り、新聞往生伝にこれを載らるといへども、今復其闕漏の一二を誌せるものなり」と記している。性均が、僧廓三の行状を記録して浄土宗鎮西派の学僧・大坂生玉宝泉寺の珂然（寛文九年、一六六九—延享二年、一七四五）に送り『新聞往生伝』に収められたのである。『新聞往生伝』とは『新聞頭験往生伝』（三巻）の略称である。龍谷大学図書館所蔵の版本（正徳元年、一七一）の表紙には、『扶桑往生全伝 新聞頭験往生部』と記されている。

『新聞顕驗往生伝』が別名『扶桑往生全伝』ともいわれるゆえんである。珂然撰『新聞顕驗往生伝』は、笠原一男編『近世往生伝集成』二（山川出版社刊）に収録されている。念仏行による瑞夢や臨終来迎の話が多い。

象王は道心堅固な僧の話を伝に載せることで、当時の僧侶たちの安逸な生活態度を戒めようとしたのではないか。また、象王の『統妙好人伝』には仰誓や僧純の『妙好人伝』以上に神秘的な話が多く載せられている。因果応報譚・怪奇譚・靈驗靈夢・蘇生譚・臨終来迎などの話が多く見られるのである。その理由として、象王が育った蝦夷地松前の風土や環境が影響したことが推測される。松前の東本願寺派（現、真宗大谷派）専念寺で過ごした象王が、松前城の近辺に集められている真言宗阿吽寺、浄土宗光善寺・正行寺、禅宗法幢寺・龍雲寺・法源寺、日蓮宗法華寺など多くの寺々が集まった環境の中で育ったため（平成十年九月一日・現地調査）、その思想に雑多なものが混在していたのではなからうか。初版から八年後に版行された改訂補刻版では、文章がかなり真宗的表現に改変されているが、その理由として、その間の象王の宗学の深化が考えられよう。

### あとがき

浄土教が民衆に受容される上で『往生伝』や『妙好人伝』の果たした役割は小さくはなかったと思われる。理知に訴える論書と異なり、人間の感情・凡情に訴える『往生伝』や『妙好人伝』は、多くの人びとに浄土往生への志願を起こさせたことであろう。しかし、両伝とも内容的にさまざまなものがあり、それを一括して論じることは問題である。

『往生伝』は、諸行や念仏行を励んで臨終時に瑞相・来迎を受け、浄土往生を遂げた人たちの伝記であり、『妙好人伝』は、真実信心を獲得してこの世で如来の大悲に抱かれ、仏恩報謝の生活を送り、如来の大悲を弘め、往生

を遂げた人たちの話を中心である。共に時代の影響を受けていることは否定できないが、往生浄土の教えが民衆にどのように受容され実践されたかを窺う上で貴重な資料である。なお、今後の課題として、教学との関係を明らかにするとともに、現代における浄土往生の意義や往生人・妙好人の思想・倫理観について再考することが必要であろう。それは現代における宗教の意義を問う作業でもある。

註(1) 『往生伝』と『妙好人伝』について述べたものに次の論文がある。

佐々木倫生「『妙好人伝』とその作者たち」(『仏教文学研究』第二号、一九六四年二月、所収)

鈴木宗憲「日本の近代化と「恩」の思想」(法律文化社、一九六四年刊) 第三章「日本の近代化と宗教的人間像」

二「妙好人の系譜と歴史的意義」

大橋俊雄「『近世往生伝』とその性格」(千葉乗隆博士還暦記念会編『日本の社会と宗教』同朋社出版、昭和五十六年刊、所収)

(2) 『往生伝』について論じたものに次のものがある。

魚澄惣五郎「日本往生伝類について」(史学会編『本邦史学史論叢』上)

田村圓澄「往生伝について」(『日本思想史の諸問題』)

西光義遵「往生伝年表」(『龍谷史談』三ノ二)

大橋俊雄「近世浄土宗における往生伝の編集に就いて」(浄土宗教学会『仏教論叢』第二二一)

大橋俊雄「『近世往生伝』とその性格」(千葉乗隆博士還暦記念会編『日本の社会と宗教』同朋社出版)

西口順子「往生伝の成立——三善為康の往生伝を中心に」(京都女子大学史学会『史窓』第一七・一八合併号)

重松明久「往生伝の研究——平安時代の7往生伝について」(名古屋大学文学部研究論集)二三三)

小栗純子「近世往生者の諸相——『緇白往生伝』を中心として」(『日本仏教』三九号)

小栗純子「『近世往生伝』について」(笠原一男編『近世往生伝集成』二)解説)

### 【参考文献】

望月信亨編『続浄土宗全書』第六卷。第一六卷(宗書保存会事務所、一九四一年)

『往生伝』と『妙好人伝』について

- 田村圓澄著『日本思想史の諸問題』（永田文昌堂、一九四八年）
- 重松明久著『日本浄土教成立過程の研究』（平楽寺書店、一九六四年）
- 鈴木宗憲著『日本の近代化と「恩」の思想』（法律文化社、一九六四年）
- 石田瑞麿著『往生の思想』（平楽寺書店、一九六八年）
- 古典遺産の会編『往生伝の研究』（新読書社、一九六八年）
- 村上速水著『親鸞教義の研究』永田文昌堂、一九六八年）
- 柏原祐泉著『近世庶民仏教の研究』（法藏館、一九七一年）
- 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局編『続浄土宗全書』第一六卷、往生伝輯録（一九七四年）
- 井上光貞・大曾根章介校注『往生伝 法華驗記』（日本思想大系7）（岩波書店、一九七四年）
- 小栗純子著『妙好人とかくれ念仏——民衆信仰の正統と異端』（講談社、一九七五年）
- 笠原一男著『女人往生思想の系譜』（吉川弘文館、一九七五年）
- 志村有弘著『往生伝研究序説——説話文学の側面——』（桜楓社、一九七六年）
- 笠原一男編著『近世往生伝の世界——政治権力と宗教と民衆』（教育社、一九七八年）
- 笠原一男編『近世往生伝集成』（全三巻）（山川出版社、一九七八—一九八〇年）
- 土井順一著『妙好人伝の研究——新資料を中心として』（百華苑、一九八一年）
- 朝枝善照著『妙好人伝基礎研究』（永田文昌堂、一九八二年）、同『続妙好人伝基礎研究』（永田文昌堂、一九九八年）、
- 同編『妙好人伝研究』（永田文昌堂、一九八七年）
- 高田衛・原道生編、西田耕三校訂『仏教説話集成』（二）（国書刊行会、一九九八年）
- 鍋島直樹著『親鸞とその門弟における死の超克』（『真宗学』第97・98合併号、一九九八年）
- 青山忠一著『近世仏教文学の研究』（おうふう、一九九九年）
- 菊藤明道著『妙好人伝の研究』（法藏館、二〇〇三年）
- 浅井成海著『法然とその門弟の教義研究』（永田文昌堂、二〇〇四年）
- 牧達雄著『未公開近世往生人伝——江戸期庶民の信仰と死』（四季社、二〇〇四年）
- 国文学研究資料館編『往生伝集』影印篇（『真福寺善本叢刊・第七巻』（臨川書店、二〇〇四年）
- 国文学研究資料館編『往生伝集』訓読・解題・索引篇（『真福寺善本叢刊・第七巻』（臨川書店、二〇〇四年）

寺林峻著『往生の書——来世に魅せられた人たち』（日本放送出版協会、二〇〇五年）

鍋島直樹編『死と愛——いのちへの深い理解を求めて』（龍谷大学人間・科学・宗教ORC研究叢書4）（法藏館、二〇〇七年）

（追記）

これまで所在不明だった諸聴撰『遺身往生伝』は、平成十八年十一月二日、長野県上水内郡飯綱町古町の真宗大谷派願法寺住職日野秀静師より同寺所蔵の版本のコピーをいただいた。また、これまで象王編『続妙好人伝』の初版本（五梅園蔵版本）の版行年は嘉永五年（一八五二）十月とされて来たが、嘉永四年（一八五一）正月版行の版本が新潟市西蒲区曾根の浄土真宗本願寺派一心寺に収蔵されていることが判明した。平成十九年十二月九日に同寺住職田子了祐師よりご教示いただいた。なお、本稿作成にあたり、平松令三・藪田香融・児玉識・浅井成海・飯島憲彬の各師より貴重な助言をいただいた。記して謝意を表したい。